

第 2 反抗期がなかった者の背景と反抗のとらえ方

丹羽智美 (四天王寺大学)

キーワード：第 2 反抗期，親，家族のバランス

問題と目的

青年期において第 2 反抗期があるとされ，以前は誰もが通る道であると言われており，それを経験しないと発達や適応に影響すると言われていた。しかし，内閣府による「我が国と諸外国の若者の意識に関する調査（平成 30 年度）」では，父母の存在について「自分のことをよく理解してくれる」と答えた子どもは 50.4%（父）68.8%（母），「うっとしい」と答えた子どもは 42.3%（父）38.8%（母）であった。このように総合的に良好な親子関係を築いている青年が複数報告されており，反抗期のない人が平均半数程度いるとされている。それらの人は反抗期がなかったことで何らかの影響が出ると言われることもあれば，発達に問題がないと言われることもある。そこで，反抗期のなかった者を対象とし，反抗期のなかった背景と反抗期のなかった人の反抗期の必要性について検討する。

方 法

調査対象者

大学生 414 名（男性 230 名，女性 184 名）を対象とした。学年別人数は，1 回生 249 名，2 回生 8 名，3 回生 152 名，4 回生 5 名であった。

調査方法

調査は無記名，任意回答で途中で回答拒否も可能であること，統計的に処理される等の事前説明に同意した者のみ，質問紙で回答を求めた。反抗期の有無を尋ね，反抗期のあった者には，始まった時期，どのような反抗をしたか，反抗期の省察，反抗期の必要性の有無とその理由を尋ねた。反抗期のなかった者に対しては，反抗期がなかった理由，反抗期の必要性の有無とその理由を尋ねた。

結果と考察

反抗期のあった者は 219 名（52.8%），反抗期のなかった者は 178 名（42.9%），その他 2 名（0.5%）であった。このうち，反抗期のなかった 178 名を分析対象とした。

反抗期がなかった理由

自由記述で回答を求めた。それらをまずは小カテゴリーに分類し，それらは以下の大カテゴリーにまとめられた。「親がさせなかった」「親子関係が良好」「意見の尊重」「きょうだいや友人からの影響」「親子関係の希薄さ」「性格や価値観」「他に注力しているものがある」「他者からのアドバイス

「その他」の 9 カテゴリーであった。なお，1 人の記述内で複数の小カテゴリーに該当することもあった。そのため，同じ大カテゴリー内において複数の小カテゴリーに関する記述があった場合，該当する大カテゴリーに関する記述を 1 とカウントした。その結果，記述内容から“反抗をしなかった者”と“反抗を必要としなかった者”があり，前者に当たる記述に言及した人は，「親がさせなかった」44 名（24.7%）「きょうだいや友人からの影響」20 名（11.2%）「親子関係の希薄さ」17 名（9.6%）であった。

次に，性差の検討を行った。各大カテゴリーに関する記述の有無に性差があるか χ^2 検定を行ったが，有意な性差はなかった。

反抗期の必要性和その理由

反抗期がなかった者が反抗期の必要性についてどのようにとらえているのかを検討した。まず，反抗期は必要と回答した者は 94 名（53.1%），反抗期は必要ないと回答した者が 39 名（22.0%），どちらでもないと回答した者が 44 名（24.9%）であった。

その理由に関する自由記述は，反抗期がなかった理由と同様に小カテゴリーに分類してから大カテゴリーにまとめた。その結果，反抗期は必要であるとした理由について，「自己の確立や自立」につながるとした人が 71 名（75.5%）と最も多かった。反抗期は必要ないとした理由について「結果の悪さ」に言及した人が 27 名（69.2%）と最も多かった。どちらでもないとした理由について「個人差」でどちらとも言い難いという人が 23 名（52.3%）で最も多かった。

これらの結果より，以下のことが言えた。まず，反抗期のなかった者が約半数おり，反抗期がなかった者の中には状況的に“反抗をしなかった者”がいた。その背景に，親だけでなく，きょうだいも含めた家族のバランスを見定めて行動していることがわかった。

そして，反抗期のなかった者であっても反抗期は必要だと一定程度考えている者が多かった。自らが反抗期を経験していたら違った自分になっていたと考えているのか，成長や発達につながる経験の 1 つであるのとらえ，なくても他で補償できると考えているのかは今後検討する必要がある。